福岡大学先端経済研究センター ワーキング・ペーパーシリーズ

『草枕』の暗号

山﨑　好裕

福岡大学経済学部

WP-2025-005

福岡大学先端経済研究センター

〒814-0180　福岡県福岡市城南区七隈八丁目 19 番 1 号

『草枕』の暗号

山﨑　好裕

概要

夏目漱石の小説『草枕』の読者は、本文中に夥しい数の俳句、漢詩、英詩が登場することに戸惑う。詩歌の作成経験がなくそれらの鑑賞にも慣れていない読者は当惑するばかりであろう。

これらの詩歌は主人公の画工が自ら創作したものであったり記憶から呼び起こしたものであったりするが、基本的には画工が趣味人であることを示している。しかし、それだけでは作者のこだわりが説明できない。本稿は、これらの詩歌が小説に隠された背後の主題を呼び起こすための暗号であるという仮説に基づいた作品読解である。

暗号解読によって示されるのは『草枕』が古事記の伊邪那岐と伊邪那美の神話を踏まえた作品であることである。ヒロインの那美が伊邪那美であることは、音と漢字の一致によって示される。また、作中に繰り返し登場する水に浮かぶオフィーリアのイメージは、伊邪那美によって捨てられた蛭子を暗示している。

主人公の画工が蛭子として母である伊邪奈美としての那美を求めるストーリーが作品を貫いている。また、那美の前夫は伊邪那岐の役割を演じ、二人によって二神の結婚と別れが再現される。

JEL 分類番号：A200、B190、N950。

キーワード：暗号、伊邪那美、蛭子、黄泉、オフィーリア。

The Code of "The Three-Cornered World"

Yoshihiro Yamazaki

Abstract

"The Three-Cornered World" is one of the novels which Soseki Natsume wrote. The novel includes so many poems like Haiku short poems, Chinese-style poems and English poems. Readers may be confused with these poems when they are not accustomed to making and understanding poems.

The painter, who is the main character of the novel, makes or remembers these poems. This shows that he is an educated person. The explanation, however, is not a sufficient reason for the author's commitment to the poetry. This paper proposes an assumption that the poems are the code through which the readers can know the hidden subject of the novel.

The decoding of the poems shows us that the novel has the same structure as the myth of Izanagi and Izanami in Kojiki, a record of Japanese ancient matters. The fact that the novel's heroine Nami is Izanami is express by the perfect match of the names' pronunciation and Chinese characters. The image of Ophelia on the surface of water, which repeatedly appears in the novel, reminds of Hiruko, who is a child abandoned by Izanami.

The main story of the novel is that the painter who impersonates Hiruko wants Nami as his mother Izanami. Nami's ex-husband plays the role of Izanagi. The two reenact the scenes of marriage and divorce of the god and the goddess in the novel.

JEL classifications: A200, B190, N950.

Keywords: code, Izanami, Hiruko, underworld, Ophelia.

はじめに

『草枕』の読者は小説を読み進めていくうちに、多くの漢詩、英詩、俳句などが出て来ることに戸惑うだろう。それらには作者による解説は何ら付けられておらず、漢詩、英詩を鑑賞したこともなく、学校以外での作句経験の無い読者にとっては煩瑣以外の何物でもない。だから、そういう読者は必然的にそれらの詩歌を読み飛ばすことになるのである。

だが、普通に考えて作者がこれら詩歌に何の意味も持たせずに作中に入れたとは考えにくい。もし意味もなくただ入れたのであれば、『草枕』という作品が漢学、洋学に素養があり、また、作句経験もあるような教養層向けのものであることを示す、鼻持ちならない衒学主義の小説だということになってしまう。

筆者は何度も『草枕』を読んだが、とりわけ初めて読んだときからヒロインの那美という名が気に掛かっていた。明治時代の片田舎化の女性の名としては何とも垢抜けているように思われたのだ。しかし、あるとき、その名が示す意味が忽然として閃いた。そして、その意味を頼りに作品を読み進めていくと物語の表面の意味と背景に退いている意味とが二重写しになることに気付いたのである。

結論から言えば、小説中に散りばめられた詩歌は読者に向けて背景の構図を読み解いてもらうための暗号であった。それは作者によって仕掛けられたかなり巧妙な暗号であり、本稿で行うのはそれを読み解く作業に他ならない。

作中の詩歌のうち、英詩は作者の創作ではない。イギリスの詩人たちの作品である。まず、シェリーの詩では雲雀の歌がテーマになっている。この詩が後に出て来る馬子唄の俳句連作を導くのである。

We look before and after
　　And pine for what is not
Our sincerest laughter
　　With some pain is fraught;
Our sweetest songs are those that tell of saddest thought[1].

もう一つ出て来る英詩はメレディスの作品である。この詩では死が主題になっている。これもまた、後に出て来る俳句連作が死者のこととその死者との交感を詠んでいることを示している。

Sadder than is the moon's lost light,
　　Lost ere the kindling of dawn,

[1] 漱石 1929、11 ページ。

To travellers journeying on,
The shutting of the fair face from my sight.

Might I look on thee in death,
With bliss I would yield my breath.

暗号の解読が単に解読者の妄想にならないためには、その意味が体系的に連関を持っていることを常時確認しておく必要がある。そうした読解に導く鍵こそ、先に述べたヒロインの名である那美なのである。

1. 那美と伊邪那美

那美の漢字は必ず那美でなければならず、奈海であっても菜実であってもならない。なぜなら、それは古事記で国生みの女神・伊邪那美のなかに使われている漢字だからである。

伊邪那美は火の神を産んだ火傷が元で死に、黄泉の国へと向かった。そして、彼女は冥界を司る神となるのである。したがって、那美のいる那古井の里はそれ自体が冥界という設定がなされていることになる。

主人公の画工は山中で降られた雨によって冥界へと入り込んでいく。

> 左はすぐ山の裾と見える。深く罩める雨の奥から松らしいものが、ちょくちょく顔を出す。出すかと思うと、隠れる。雨が動くのか、木が動くのか、夢が動くのか、何となく不思議な心持ちだ（漱石 1929、17 ページ）。

画工は鈴の音を聞いて馬子と出会い会話を交わす。鈴の音は亡者を導くためのもの。馬子は冥界への案内人である。

> 帽子から雨垂れがぽたりぽたりと落つる頃、五、六間先きから、鈴の音がして、黒い中から馬子がふうとあらわれた（漱石 1929、18 ページ）。

馬子から教えられたとおりに歩いて、画工は雨を凌げる一軒の茶屋に入った。一人の老婆が出て来て、画工は昔見た能の『高砂』を思い出す。

> 余の席からは婆さんの顔が殆んど真むきに見えたから、ああうつくしいと思った時に、その表情はぴしゃりと心のカメラへ焼き付いてしまった。茶店の婆さんの顔はこの写真に血を通わしたほど似ている（漱石 1929、20 ページ）。

この老婆は奪衣婆かとも思われるが、伊邪那美の老いた姿と考えた方がよいだろう。なぜなら、謡曲『高砂』の尉と姥は松の木の精であると同時に伊邪那岐と伊邪那美のことだとされるからである。

老婆から画工は、嫁に行く那美が茶屋の前を通ったときの話を聞かされる。そうして、4句の俳句を詠むのである。

春風や惟然が耳に馬の鈴
馬子唄の鈴鹿越ゆるや春の雨
馬子唄や白髪も染めで暮るる春
花の頃を越えてかしこし馬に嫁[2]

馬の鈴の音、春の雨、老婆の白髪、嫁に行く那美の姿。いずれも、目の前の風景と老婆から聞いた話で想像した風景を読んだ句だと思われるだろう。だが、問題は、最後の句が登場した直ぐ後に、那美がオフィーリアのように仰向けに水に浮いている姿が主人公に思い浮かぶことである。この空想は何の前触れも無くて実に唐突である。この不自然さを解消するには、これらの句に何らかの暗号が隠されているのでなければならない。

> 衣装も髪も馬も桜も、一瞬間に心の道具立から奇麗に立ち退いたが、オフェリアの合掌して水の上を流れていく姿だけは、朦朧と胸の底に残って、棕櫚帚で烟を払うように、さっぱりしなかった（漱石 1929，27 ページ）。

では、いったいこれらの句のどこに暗号が隠されているのであろうか。それは「馬子唄」であると思われる。この単語をクローズアップする仕掛けは、シェリーの雲雀の詩に込められていた。歌が鍵であるということだ。この「馬子唄」は同音の意味変換によって「紛うた」であると解釈でき、間違ったという意味になる。

伊邪那岐と伊邪那美は天の御柱を廻った後、女神の方から声を発するという間違いを犯した。その間違いのために不具の子である蛭子が生まれ、伊邪那岐と伊邪那美は葦舟に乗せて蛭子を流したのである[3]。仰向けに水の上を流れるイメージは蛭子のものだったのだ。

この蛭子が水の上に浮かぶモチーフは作品の中で何度も繰り返されることになる。

---

[2] 漱石 1929、24－27 ページ。

[3] 如此之期、乃詔「汝者自右廻逢、我者自左廻逢。」約竟廻時、伊邪那美命、先言「阿那邇夜志愛上袁登古袁。」後伊邪那岐命言「阿那邇夜志愛上袁登賣袁。」各言竟之後、告其妹曰「女人先言、不良。」雖然、久美度邇興而生子、水蛭子、此子者入葦船而流去。次生淡嶋、是亦不入子之例（古事記上巻）。

2. 蛭子とオフィーリア

水の上を流れるオフィーリアのイメージとして主人公に憑りついた蛭子によって、画工は蛭子の視点からものを見るようになっていく。画工が写生帖に書き付けた俳句が死を主題にしたものであることは、作品中この後出て来る、メレディスの死をテーマにした死によって示されている。

海棠の露をふるふや物狂ひ
花の影女の影の朧かな
正一位女に化けて朧月
春の星を落して夜半のかざしかな
春の夜の雲に濡らすや洗ひ髪
春や今宵歌つかまつる御姿
海棠の精が出てくる月夜かな
うた折々月下の春ををちこちす
思ひ切つて更け行く春の独りかな

女の影、簪、洗い髪、母の姿。これらは全て母である伊邪那美を恋い慕う蛭子が求めて止まないものである。しかし、春の夜に蛭子は一人ぼっちでいる。もちろん、画工も未だ那美の姿を見ていない。

画工は宿の湯に浮かび、自ら蛭子を演じる。そして、次のような戯れ歌を詠むのである。

雨が降ったら濡れるだろ。
霜が下りたら冷たかろ。
土の下では暗かろう。
浮かば波の上、
沈まば波の底、
春の水なら苦はなかろ。

蛭子は葦舟で流されて、主人公が春の雨に降られて濡れたようにぐっしょりと濡れている。そして、蛭子がいる死の世界は冷たく暗い場所なのだ。歌の「波」が那美であることは言うまでもない。蛭子は浮かびつ沈みつ母である伊邪那美を恋い慕う。最後の句は、蛭子が自らを慰める自己鎮魂のフレーズである。

伊邪那美が死んで黄泉の国に行ってしまったため、伊邪那岐は嘆き悲しんで妻に会いに

行くことを決意する。主人公の画工が訪れた里の名である「那古井」は同音の意味変換によって「汝恋ひ」と解釈でき、汝を恋い慕うという意味になる。だが、黄泉の国まで下りて行った伊邪那岐が見たのは、手に持った灯りに照らし出された亡き妻の、腐乱して蛆がわいた遺体であった[4]。『草枕』の主人公もまた、風呂場で那美の一糸纏わぬ裸体を目の当たりにすることになる。

> 頸筋を軽く内輪に、双方から責めて、苦もなく肩の方へなだれ落ちた線が、豊かに、丸く折れて、流るる末は五本の指へと分れるのであろう。ふっくらと浮く二つの乳の下には、しばし引く波が、また滑らかに盛り返して下腹の張りを安らかに見せる。張る勢を後ろへ抜いて、勢の尽くるあたりから、分れた肉が平衡を保つために少しく前に傾く。逆に受くる膝頭のこのたびは、長きうねりの踵につく頃、平たき足が、凡ての葛藤を、二枚の蹠に安々と始末する（漱石 1029、96 ページ）。

伊邪那美である那美は蛭子である画工の思いを受けて、自らも池に身を投げて水に浮かぶことを語る。鏡が池のシーンである。

> 「あなたはどこへいらしったんです。和尚が聞いてましたぜ、また一人散歩かって」
> 「ええ鏡の池の方を廻って来ました」
> 「その鏡の池へ、私も行きたいんだが…」
> 「行って御覧なさい」
> 「画をかくに好い所ですか」
> 「身を投げるに好い所です」
> 「身はまだなかなか投げないつもりです」
> 「私は近々投げるかもしれません」
> 余りに女としては思い切った冗談だから、余はふと顔を上げた。女は存外慥かである。
> 「私が身を投げて浮いているところを―苦しんで浮いているところじゃないんです―やすやすと往生して浮いているところを―奇麗な画にかいて下さい」（漱石 1929、121－122 ページ）

---

[4] 於是、欲相見其妹伊邪那美命、追往黄泉國。爾自殿騰戸出向之時、伊邪那岐命語詔之「愛我那邇妹命、吾與汝所作之國、未作竟。故、可還。」爾伊邪那美命答白「悔哉、不速來、吾者爲黄泉戸喫。然、愛我那勢命、入來坐之事恐。故、欲還、且與黄泉神相論。莫視我。」如此白而還入其殿內之間、甚久難待、故、刺左之御美豆良、下效此湯津津間櫛之男柱一箇取闕而、燭一火入見之時、宇士多加禮許呂呂岐弖、於頭者大雷居、於胸者火雷居、於腹者黒雷居、於陰者拆雷居、於左手者若雷居、於右手者土雷居、於左足者鳴雷居、於右足者伏雷居、幷八雷神成居（古事記上巻）。

3. 淤能碁呂島の那美と前夫

伊邪那岐と伊邪那美が未だ島の無かった海中に天から鉾を差し下ろしてかき混ぜると、鉾の先から潮が滴って固まりオノコロ島ができた[5]。那美の姓である志保田のシホは言うまでもなく潮の意味である。

このオノコロ島に降り立った伊邪那岐と伊邪那美は向かい合って互いに声を掛け合う[6]。そのシーンが『草枕』で再現されているのが、那美が日露戦争に出征する前夫と会う場面である。

> 二人は双方で互に認識したように、次第に双方から近付いて来る。余が視界は漸々縮まって、腹の真中で一点の狭き間に畳まれてしまう。二人は春の山を脊に、春の海を前に、ぴたりと向き合った（漱石 1929、158 ページ）。

画工はこれを木瓜の花の間から二人に気付かれずに見るのである。画工は全くこの場面の当事者ではない。二人が何を話しているかは聞えないし、二人に何か声を掛けるわけでもない。

> 男女は向き合うたまま、しばらくは、同じ態度で立っている。動く景色は見えぬ。口は動かしているかも知れんが、言葉はまるで聞えぬ。男はやがて首を垂れた。女は山の方を向く。顔は余の目に入らぬ（漱石 1929、158 ページ）。

これはあの世から現世を見ている死者の視点である。つまり、主人公は死んだ蛭子の視点から父母である伊邪那岐と伊邪那美の姿を眺めているのである。

主人公が二人の様子を覗き見ているのは木瓜の茂みの中からである。画工は満開の木瓜のなかで次の句を詠んでいた。

---

[5] 於是天神、諸命以、詔伊邪那岐命・伊邪那美命二柱神「修理固成是多陀用幣流之國。」賜天沼矛而言依賜也。故、二柱神、立天浮橋而指下其沼矛以畫者、鹽許々袁々呂々邇畫鳴而引上時、自其矛末垂落之鹽累積、成嶋、是淤能碁呂嶋（古事記上巻）。

[6] 於其嶋天降坐而、見立天之御柱、見立八尋殿。於是、問其妹伊邪那美命曰「汝身者、如何成。」答曰「吾身者、成成不成合處一處在。」爾伊邪那岐命詔「我身者、成成而成餘處一處在。故以此吾身成餘處、刺塞汝身不成合處而、以爲生成國土、生奈何。」伊邪那美命答曰「然善。」爾伊邪那岐命詔「然者、吾與汝行廻逢是天之御柱而、爲美斗能麻具波比（古事記上巻）。

木蓮の花ばかりなる空を瞻る[7]

画工は空を背景にして木瓜の花を眺めている。主人公には青空と木瓜の花が見えるだけである。これは仰向けに大地に横たわる死者の視界である。つまり、主人公は死者として物陰にいて現世の様子を見ているということなのだ。

主人公と那美は、那美の従弟の久一が日露戦争に出征のを見送るために船に乗って停車場へと向かって行く。これは伊邪那美と蛭子が一緒に水上を流れていくということである。

> 川幅はあまり広くない。底は浅い。流れはゆるやかである。舷に倚って、水の上を滑って、どこまで行くか、春が尽きて、人が騒いで、鉢ち合わせしたがる所まで行かねばやまぬ（漱石 1929、168 ページ）。

船上で画工は写生帖に句を書いて見せる。それが次の句である。

春風にそら解け繻子の銘は何

句意としては、画工が那美の帯地の銘を聞いているのだが、この銘は墓碑銘と受け取ることができる。つまり、死んでいるのは蛭子なのか伊邪那美なのかと問うているわけである。

黄泉の国を訪れ、亡き妻の恐ろしい姿を目撃した伊邪那岐は現世に逃げ帰ってくる。そして、黄泉平坂という現世と冥界の境に巨大な岩を置いて出入りができないようにしてしまう。その岩を挟んで伊邪那岐は伊邪那美に最後の別れを告げるのである[8]。

『草枕』も、那美と前夫との汽車の窓越しの別れの場面で終わっている。

> 茶色のはげた中折帽の下から、髭だらけな野武士が名残り惜気に首を出した。そのとき、那美さんと野武士は思わず顔を見合せた。鉄車はごとりごとりと運転する。野武士の顔はすぐ消えた。那美さんは茫然として、行く汽車を見送る。その茫然のうちには不思議にも今までかつて見た事のない「憐れ」が一面に浮いている（漱石 1929、176 ページ）。

---

[7] 漱石 1929、140 ページ。

[8] 最後、其妹伊邪那美命、身自追來焉。爾千引石引塞其黄泉比良坂、其石置中、各對立而、度事戸之時、伊邪那美命言「愛我那勢命、爲如此者、汝國之人草、一日絞殺千頭。」爾伊邪那岐命詔「愛我那邇妹命、汝爲然者、吾一日立千五百産屋。」是以、一日必千人死・一日必千五百人生也。故、號其伊邪那美神命、謂黄泉津大神。亦云、以其追斯伎斯而、號道敷大神。亦所塞其黄泉坂之石者、號道反大神、亦謂塞坐黄泉戸大神。故、其所謂黄泉比良坂者、今謂出雲國之伊賦夜坂也（古事記上巻）。

おわりに

『草枕』には作者自作の漢詩も 2 編登場する。
最初が、風呂場に行く前に主人公が部屋で作った漢詩である。

青春二三月。愁随芳草長。閑花落空庭。素琴横虚堂。蠨蛸掛不動。篆煙繞竹梁。独坐無隻語。方寸認微光。人間徒多事。此境孰可忘。会得一日静。正知百年忙。遐懐寄何処。緬邈白雲郷。

旅情を謡っているが一人旅であることがテーマの何の変哲もない詩である。
二番目が、木瓜の花を眺めて作った詩である。

出門多所思。春風吹吾衣。芳草生車轍。廃道入霞微。停筇而嘱目。万象帯晴暉。聴黄鳥宛転。観落英紛霏。行尽平蕪遠。題詩古寺扉。孤愁高雲際。大空断鴻帰。寸心何窈窕。縹緲忘是非。三十我欲老。韶光猶依々。逍遥随物化。悠然対芬菲。

これも木瓜の花の間を一人散歩することを詠っていて、特に怪しい点はない。
思うにこれらの漢詩は、俳句や戯れ歌が暗号になっていることをカモフラージュするために置かれているのではないだろうか。英詩が俳句の暗号を解く鍵になっているのと対照的な役割である。
暗号は意味をわからせないためのものであるが、全くわからないのでは暗号の意味はない。暗号である以上は、意味を知らせたくない相手にはわからないようにし、知らせたい相手にはわかるようにする必要がある。さらに、もっといいのは、わからせたくない相手には、暗号であることを気付かせないことである。それが自作の漢詩の役割であった。

【参考文献】
夏目漱石『草枕』岩波文庫、1929 年。